

原作 十返舎一九  
（『東海道中膝栗毛』）

お笑い

にほんぶし 熟土

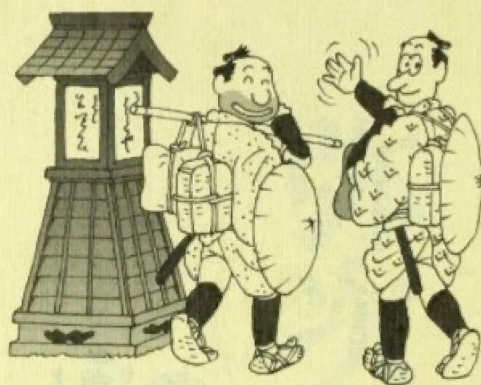


ことば たつじん  
日本語の達人になつちやおう!

ことば つか  
こんな言葉が使えたらカッコいいぞ!

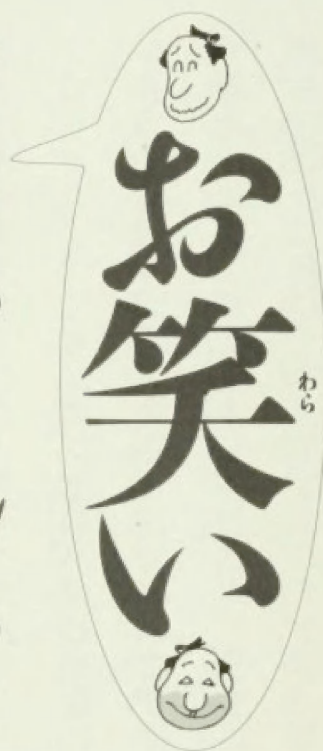
PHP研究所

上<sup>うへ</sup>のイラストの中に、  
日本語の慣用句<sup>かんようく</sup>がかくれているよ!  
見<sup>み</sup>つけてごらん!  
(答えはカバーの後ろソデにあります)





弥次<sup>やじ</sup>さん 喜多<sup>き</sup>さんの



にほん<sup>にほん</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>塾<sup>じゅく</sup>

作<sup>さく</sup> 齋藤<sup>さいとう</sup> 孝<sup>たか</sup>

原作<sup>げんさく</sup> 十返舎<sup>じゅうへんしゃ</sup>二九<sup>にじゅう</sup> (『東海道中膝栗毛』)

この本ほんを読よむみんなへ

齋藤 孝さいとう たかし

さあみんな、おもしろくてためになる、お笑い日本語にほんごの旅たびへようこそ。

僕は小学生しょうがくせいのとき、『東海道中膝栗毛とうかいどうちゅうひざぐりげ』っていう本ほんを読よんで、弥次さん、

喜多きたさんの大ファンになっちゃったんだ。バカみたいなことばっかりやつ

ててサイコー。でも、ホントのバカじゃない。「だじやれ」や「ことわざ」

をドンドン使つかって話はなしをする。じつはふたりは日本語にほんごの達人たつじんだったんだね。

みんなにも、弥次喜多やじきた（弥次さん、喜多きたさんのこと）の日本語力にほんごりきのすご

さを味あじわってほしくて、僕ぼくはこの本ほんを書かいた。おもしろくて便利な言葉べんりなことばを

たくさん、もうムリヤリ入れこんでパワーアップさせてみました。

まずは本文ほんぶんを読よんで、それから「弥次さん喜多やじきたさんの日本語にほんごよもやま話ばなし」

でカンペキにしてくれたまえ。



一  
さあはじまるよ



駿州府中  
すんしやうふなづ

弥次さん喜多さんのお笑いにほんご塾 目次

この本を読むみんなへ 2

一 さあはじまるよ

駿州府中 ◆ 5

二 お伊勢まいりへ

江戸 神田八丁堀 ◆ 25

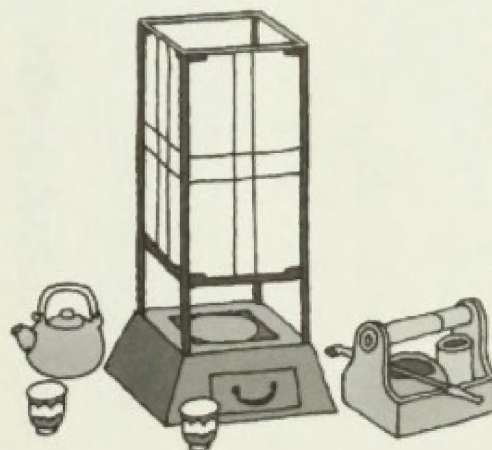
三 ダンゴと江ノ島

神奈川 藤沢の宿 ◆ 43

四 風呂騒動

小田原の宿 ◆ 69

索引 弥次さん喜多さんの日本語で遊ぼう 92



さあはじまるよ、日本一の旅物語。

お笑い道中、夢道中。その名も東海

旅行

道中膝栗毛。

抱腹絶倒、疾風怒濤、天下無敵

大笑い

ハラハラドキドキ だれにも負けない

の男が行く。おもしろいし、ため

になる、一石二鳥のお話だ。

ふたつに役立つ

とさ、とーさー。どちらに

さあさあ、すみからすみまで

お住まいのみなさんも、この話を

聞いていきなさい。

うっかり者の弥次さんと、男前

ハンサム





江戸の昔、十返舎一九が書いた『東海道中膝栗毛』。  
弥次さんと喜多さんが、今の三重県にある伊勢神宮へ  
のおまいりのため、東海道を旅していく。東海道とい  
えばみなさんご存じ東海道新幹線だが、もちろんふた  
りは「のぞみ」なんかには乗りはしない。ぜいたくして  
も、ほんのときたま馬か籠に乗る程度。長い道のりを  
てくてく歩き、夕暮れには宿をさがす毎日だ。  
しかしこの旅、そりやーめつぼうおもしろい。何巻  
にもわたる『膝栗毛』はすべて、ポケモンかワンピ―  
スカという大ヒット。弥次喜多コンビは、そのへんの  
芸人などくらべものにならない人気者。みなさんにも  
そのおもしろさ、十分味わっていただきましょう。

この弥次さんは、みかけがすごい。

色が黒くて目が三角、口は大きくヒゲだらけ。足は水虫だらけでガツサガサ。

さらに、寢息のくさいことったらありやしない、まわりの人の鼻が曲がつちまうくらいだ。おまけにスケベときたもんだ。

こんな男は、きらわれ者の、鼻つまみ者の、厄介者になつてしまふと昔仲間はずれ

から相場が決まっている。

そりいふとになつてゐる

ところがどっこい、親は大金持ちで、百両や二百両のお金には困らない

ひやくりやう にひやくりやう  
そりそこの大金

ほどの財産があつたというから、運がいい。

役者の喜多さんが、お江戸八百八町をあとにして、お伊勢まいりの旅に出

たくさんの方が集まった大都市・江戸

るよ。

さあ、わっしょいわっしょい盛り上げられ。

昔っから、かわいい子には旅をさせよ、というじゃないか。

子どもがかわいければ苦労させよ

案ずるより産むが易し、千里の道も一歩から、犬も歩けば棒に当たる、

なやむよりやちやうほうがカンタン

長い道のりもはじめはまず一歩

何かをはじめれば思いがけないこともある

ってんで、そのけそこのけ弥次喜多が通る。

では、出発の前にこのふたりを紹介しようじゃありませんか。

弥次さんの名前は栃面屋弥次郎兵衛といいまして、駿州（駿河）府中、

今でいう静岡市の生まれでございます。



ハナミズハナノスケ。

しかし弥次さんにとっちゃあ、運命の  
出会い、ここにあったり。この鼻之助  
そ、のちの喜多さんなんであります。

喜多さんは、やせてもかれても役者の

落ちふれたつて

はしくれ、腐つても鯛。さすがに色男で、  
もとかいいので、なんとかなる

ジャニーズに入れてもなんとかごまかし

てやれるくらいの器量よしだった。

カツコいい人

おまけに一を聞いて十を知る、目から鼻へ抜ける、頭のよさだったので  
少し聞いただけで、ぜんぶがわかる。とてもかしこい



おかげで弥次さんは、酒や遊びに湯水のごとく金を使うすねかじり。  
思いつきり

まわりから親不孝者といわれても、これが、

馬の耳に念仏、馬耳東風、豚に真珠、猫に小判。

聞く耳もたず

知らん顔

何をいわれているのかもわからない

泣く子も黙る、太っ腹な遊び人になってしま  
おそろしい

堂々とした

つた。

その弥次さんが入れこんだのが、たまたま

気をひこうと金をあてた

駿州府中にやってきた旅芸人、華水多羅四郎

の一座にいた、華水鼻之助という役者さん。

なんともしまらない名前じゃありませんか、ハナミズタラシロウに



なんて好き放題やってるうちに、とうとう実家の金を使い果たし、そのうち借金地獄におちてしまった。





あります。

このブ男と男前、一見正反対に見えるふたりが、馬が合ったっていうから人生は不思議。ふたりは傍若無人、そばに人がなきがごとくの放蕩三昧、遊びのかぎりをつくすのだった。  
人目を気にせず  
気が合った  
好き勝手をし放題

「金は天下の回りもの、ホイ」

金は使ってこそ世の中を回っていくもの

「生きてるうちが花なのよ、ホイ」

「死んで花実がなるものが、ホイ」

死んでしまえばいいこともない

「明日は明日の風が吹く、ホイ」

明日のことを今日なやんでもしょうがない

「レット・イット・ビー、ホイホイホイ」  
なるようにいなるは

オレたちや逃げ足の速さがとりえだからね

いいところ

弥次「ま、逃げだすなら夜。夜逃げつてのはドキドキ、ワクワクするねえ。

しばらく駿河ともおさらばじゃ」

なんて失礼千万なことをいつている。そして、

めちやくちや失礼

借金富士の山ほどあるゆえに

そこで夜逃げを駿河ものかな

「駿」と「する」をひっつけたダジャレ短歌を、最後つ屁ブーとばかりに

のこし、這々の体で逃げだして、華のお江戸へ移り住むのであります。

やつとの思い

ふるさとにいられなくなったふたりがどうしたか、というところ……

弥次「ふつうは、立つ鳥あとをにこさず、って

出て行く者はあと片づけをしていく

いうけど、オレたちやファンだらけで、  
にこしまくって逃げちやうもんねー。

### 脱兎のごとく

逃げるつらぎのように

喜多「なんでえ、その脱兎のごとくって？」

弥次「ウサギみたいに逃げ足が速いってこ

とでえ」

喜多「そりやあ、いい言葉だねえ。」







抱腹絶倒

「抱腹」は、腹を抱える、「絶倒」は、ハデに倒れることだ。「腹を抱える」って言葉は大笑いするときに使うことは知ってるな。つまり、「抱腹絶倒」は、笑いこけるってえわけだ。



疾風怒濤

「疾風」は「はやて」ともいう。すごく速い風のこと。「怒濤」は荒れくるう波。激しい風と波に、吹き飛ばされたり、持ち上げられたり振り落とされたり……。まあ、ジェットコースターみてえなもんだ。



天下無敵

もちろん、このオレのこと。文字どおり、「天下に敵無し」。世の中にまともに戦う相手になるものがないほど強い、すごいってことだあ。オレに張り合おうと思ってもムダだよ。おとなしくしてな。



一石二鳥

鳥を落とそうとして石を投げたら、ひとつの石で、二羽の鳥が落ちたってわけだ。こいつはラッキー。ひとつで、ふたつのいいことがある。「おもしろくて、ためになる」、オレらの話も「一石二鳥」ってことさ。



## やじ 弥次さん きた 喜多さんの



鼻つまみ者

・イヤなおいがしてきたら、すぐに鼻をつまむだろう。その場所から離れようともするだろう。そんなふうには、みんなからイヤがられたり、きらわれたり、遠ざけられたりするヤツのことだ。



湯水のごとく

風呂に湯をいっぱい張り、ざばうんと飛びこむ。もちろん湯は、さんざんあふれるが、そんなことは気にしねえ。もったいないだの、足りなくなつたらどうしようだの、そんなことあ考えねえ。これが「湯水のごとく」の心意気だ。まあ、ペツトボトルで買つてたんじゃあ「湯水のごとく」

く「は使えないかもしれねえな。」



すねかじり

「すね」は、足のひざから下、足首までのところ。自分で働いて生活していくことができずに、親やきょうだいの金にたよつて生きていくことを、人の「すねをかじる」とつていうんだな。



馬の耳に念仏

「念仏」は、「なむあみだぶつ」のように、仏様の名前を唱えること。だけど馬が聞いたつて、そのありがたさはわからねえ。で、もちろん聞きやしない。わからないヤツには、何をいつてもムダつてこと。





かわいい子には旅をさせよ

旅は楽しいとはかぎらねえ。た  
めしにひとりで出かけてみな。まわりは知  
らない人ばかりで、親や家族みたいにや  
さしくしてくれるわけじゃねえ。でも、そ  
うして世間の風に当てることが、子どもを  
強くし、成長させるつてもんだ。だから、  
本当に子どもがかわいいなら、ちゃんと、  
苦労をさせとけつてことさ。



案ずるより産むが易し

「案ずる」は、心配する。「易し」  
は、カンタン。はじめる前に、あーだ、こ  
ーだと心配するより、実際にやっちゃえば、  
意外にカンタンつてことだな。やってみち



千里の道も一歩から

「千里」は、距離をあらわす単位。  
「千里」つてのは、とっても長いつてことだ。  
でも、どんなに長い道のりも、はじまりは  
いつだって最初の一步からと決まってる。  
まあ、とにかくはじめてみるか。



犬も歩けば棒に当たる

「いろは歌留多」にもある言葉だ。  
「棒に当たる」つてのは、思いもかけない災  
難や、ぎやくに幸運に出会つてこと。何  
かをしようとすれば、やっぱりなかなか思  
いどおりにはいかないもんだ。

## や じ 弥次さん き た 喜多さんの



太っ腹

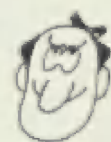
・「腹」には、その中に、その人間の気持ちや考えがおさまっているって感じがあるんだな。たとえば、するくてイヤなヤツを「腹黒い」なんていうだろう。「太っ腹」は、その「腹」が太い。大きいってこと。気持ちが広くて、大きくて、小さなこととでウジウジなやんだり、ビクビクしたりはしねえんだ。



やせてもかれても

人にはいろいろな変化がある。つらい目にあうこともある。でも、どんなにやせておとろえようが、落ちぶれてはるほろになろうが、見る人が見りや、もとの姿

がわかるってことよ。



腐っても鯛

鯛といやあ魚の王様。姿は美し、味はよし。おまけに、こりや「めで鯛」ときたもんだ。たとえばつとかれて腐っても鯛のよさはなくならねえ。もとがよければ、多少の傷はなんとかなるということさ。いいものは、やつぱりいいってことだねえ。



一を聞いて十を知る

ちよつと話を始めると、そこから話の全体を読みとつて、「わかった」と、答えが返る。こりや話が早いね。気持ちがいいね。だから頭がいいヤツは大好きだ。

にほんご ばなし  
日本語よもやま話

さあはじまるよ



馬耳東風

これまた馬の耳の話で、今度は「東風」。風はただ通りすぎるだけだ。馬のヤツ、気にもしなけりや、聞きもしない。人が何を話そうが意見しようが知らん顔、つてえときに使う言葉だ。



豚に真珠

真珠つてえのは貴重なものだ。価値がある。まあ、オレたち人間様にとつてはな。ところが豚にはどうだろう。食べられるもんでもなけりや、何かの役に立つもんでもない。だから、どうでもいいわけだ。どんなにリツパなものやすばらしいものでも、その価値がわからないヤツには関

係ないし、ありがたくもないってことだな。



猫に小判

「豚に真珠」と同じで、猫に金をやったつて、価値がわからないから、意味がないってこと。猫にやるくらいなら、オレによこせってことだな。



泣く子も黙る

だだをこねて、泣きじゃくる小さな子には、どんな大人も手を焼くもんだ。何をいつても聞きやしねえ。だが、そんな子どももびたりと泣きやむ。それほどおそろしいのが「泣く子も黙る」オレ様だあ。

## やじ 弥次さん き た 喜多さんの



金は天下の回りもの

金は、自分のふところに、じつとどめておいてもしょうがない。止まっているもんじゃねえからな。使つてやつてこそ、世の中を動いてぐるりと回つて、いつかはオレのところにもどつてくるのさ。



死んで花実がなるものか

花が咲いたり、実がなつたりするうちに、世の中には、いい結果を手に入れたり、リツパな身分になつて楽しい思いができたりすることがあるもんだ。でも、すべて生きてるうちのこと。死にまっちやあ、しょうがねえ。



明日は明日の風が吹く

いつてみりや、今日が終われば一度リセット。明日になれば、何かが変わつて、いいほうにころがることもあるだろう。そのときがきたら考えよう。今から、先のことをいろいろ考えて、なやんでみたつてしかたねえつてことよ。



立つ鳥あとをにこさず

飛び立つ鳥は、それまでいた場所を、フンも何も、見苦しくないように、片づけてから出ていくそうだ。まあ、いなくなるときは、まわりに迷惑をかけないように、すべてきちんとしてから行けつてえ教えだな。





目から鼻へ抜ける

目のすぐ下には鼻があるだろ。

だから、目から鼻へは近くて早い。つまり、  
りこうで、頭の回転が速く、聞いたことを  
理解するのも、答えを出すのも、早いって  
こと。そのうえ判断や行動もすばやくて、  
損になるようなことはしないってわけだな。



馬が合う

馬は古くから、人に飼われ、身

近にいる動物なんで、馬についての言葉は  
多い。で、馬に乗るときは、馬と乗り手の  
呼吸がぴったり合えば、ウマく乗れるとい  
うもんだ。そこから、人と人の気が合うと  
きも、馬が合うっていうんだな。



傍若無人

「傍ら」は、そばに、近くにつて

こと。何かしようと思ったとき、もしそば  
で人が見ていれば、ヘマしたらみつもな  
いとか、カッコ悪いとか思つてやめること  
もあるだろう。だが、だれも見えていないと  
くりや、気にならない。「傍若無人」は、人  
がいようがいまいが関係なしに、人目を気  
にせず、好き勝手に行動することだ。



放蕩三昧

「放蕩」も「三昧」も、心のまま、

自分のほしいままに熱中し、ほかのことは  
考えないで、やりたい放題にすることだ。

# 二 お伊勢まいりへ





脱兎の「とく」

「脱兎」は、逃げる兎、脱走する兎のことだ。ウサギはもともと足が速い動物の代表みたいにいわれるが、臆病者だし、逃げるときには、さらに速い。何かにおどろいて、あつという間に逃げちまつウサギのように足が速い、つてえことだ。



失礼千万

「千万」をつけると、数が多くなる。なんといつても、「千」と「万」だ。つまり、より程度が大きくなる、ひどくなるつてえことだ。たんなる失礼じゃなく、とても失礼、失礼このうえないわけだ。「無礼千万」なんて言い方もあるな。



這々の体

「這」は、這う。つまり、這うようにしてつてことだ。ひどい目にあったり、さんざん責められたりして、身をちぢめ、小さくなつて、コソコソと、やつとの思いで逃げだすことだ。



さあてさてさて、江戸に移ったふ  
たりの暮らしっぷりはというと……。

昔取った杵柄、三つ子の魂百まで、

一履身につけたつて前年をとつても性質は変わらない

梅檀は双葉より芳し、といえますよ

成功する人は子どものころからめだつ

うに、ふたりは急に変われない、ク

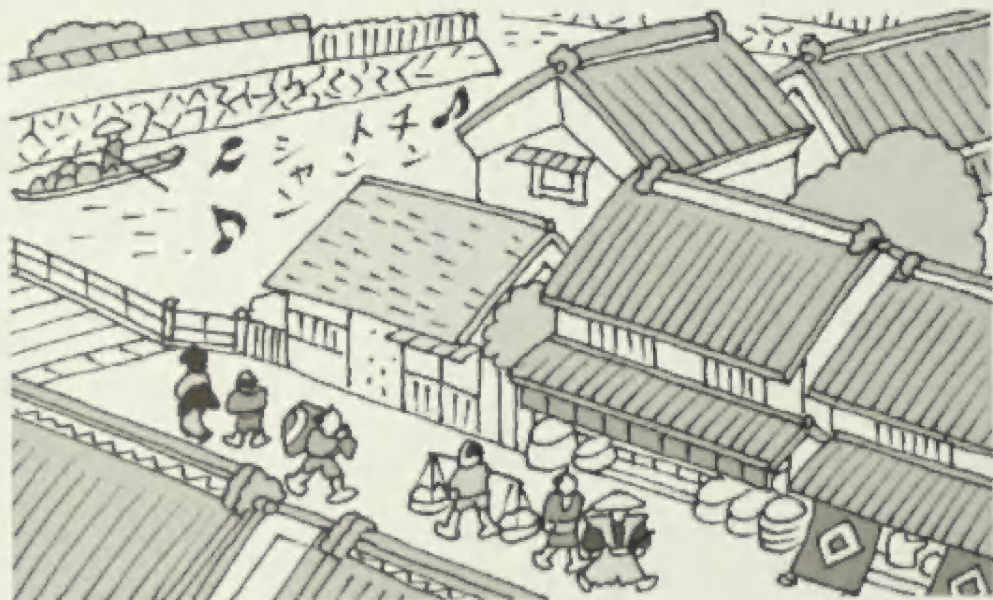
ルマは急に止まれない。いいかげん

でだらしないダメ男ぶりにますます

拍車<sup>はくしや</sup>が掛<sup>か</sup>かるばかり。

いきおいがつく

おいしい江戸<sup>えど</sup>前の魚<sup>うしほ</sup>のうまみにの





ところで、弥次さん喜多さんが出かけたお伊勢まいりは、江戸の人たちが、一生に一度は行ってみたいとあこがれる人気イベント。そもそも当時の人たちが旅行をするのは大変だった。何のためにどこに行くのか、ちゃんとお上に届けを出して、手続きしなくちゃいけなかった。出かける理由が、伊勢神宮へのおまいりならば、おやまありツバ、よい心がけと、チェックもだいぶん甘くなる。御陰年という特別な年ならば「おかげまいり」で、さらによい。おまいりの人には親切にと、食事だ宿だと助けてもらえることもある。グループでおまいり旅行する人も多いので、まぎれこめれば得もある。というわけで、ふたりは伊勢をめざすのだった。

割れ鍋に綴じ蓋、割れた鍋にも合う蓋があるもので、世の中、捨てたもんじやありません。

とはいうものの、「宵越しの銭は持たねえぜ」なんて江戸っ子をきどつて

今日の金は今日使う。明日にはのこさない！

好き放題ぜいたくをするうちに、二度あることは三度ある、またしても借

一回あつた悪いことは必ず三回くり返される

金取りのお世話になった。

二進も三進もいかなかった。

まさに四面楚歌、まわりは敵だらけの背水の陣。

味方は見えず

絶体絶命の立場

窮鼠猫を囓む、状況だ。

追いつめられ、必死になれば何でもできる

弥次「……で一発逆転、起死回生のアイデアってえのはないものかねえ？」

一氣にぜんぶ解決、生き返って完全復活

めりこんで金を使いはたしたあとは、ふたりが住む神田八丁堀の家だったら、その地域のなまけものたちの寄り合い場所になってしまった。

お酒のとつくりがいつもひっくり返ってて、下手な三味線がいつもピンコラ鳴っているようなひどい部屋。

江戸の町からしてみれば、弥次さん喜多さんは飛んで火に入る夏の虫、  
自分からあふないところへ飛びこむ人  
お金を使ってくれるいいお客さんだったのかもしれない。

いいことといえば、弥次さんがお嫁さんをもらったことくらい。

蓼食う虫も好き好きといひまして、こんなダメな男にも奥さんができた  
人の好みはさまざま  
のです。

このふたり、逃げだすばかりのお気楽人生なんでございます。

弥次「おい喜多さん、今度はどこに逃げたそうか？」

喜多「厄払いの旅にでも出たほうがいい」

災難を払い落とす

弥次「そうだ、お伊勢さんにおまいりしよう！」

喜多「弥次さん、そりゃあ、いい思いつきだ。お伊勢まいりなら、みんなが

やること。借金取りも大目に見てくれるだろう。

少しはやさしくして

おかげまいりの道中といやあ、功德になるといつて、ただで寝泊まり

よいおつこない

させてくれるし、ごはんもくれるだろう。

渡りに船、川を渡ろうと思ったところに、つごうよく船が来たような

困っている人を助けてあげたみたい



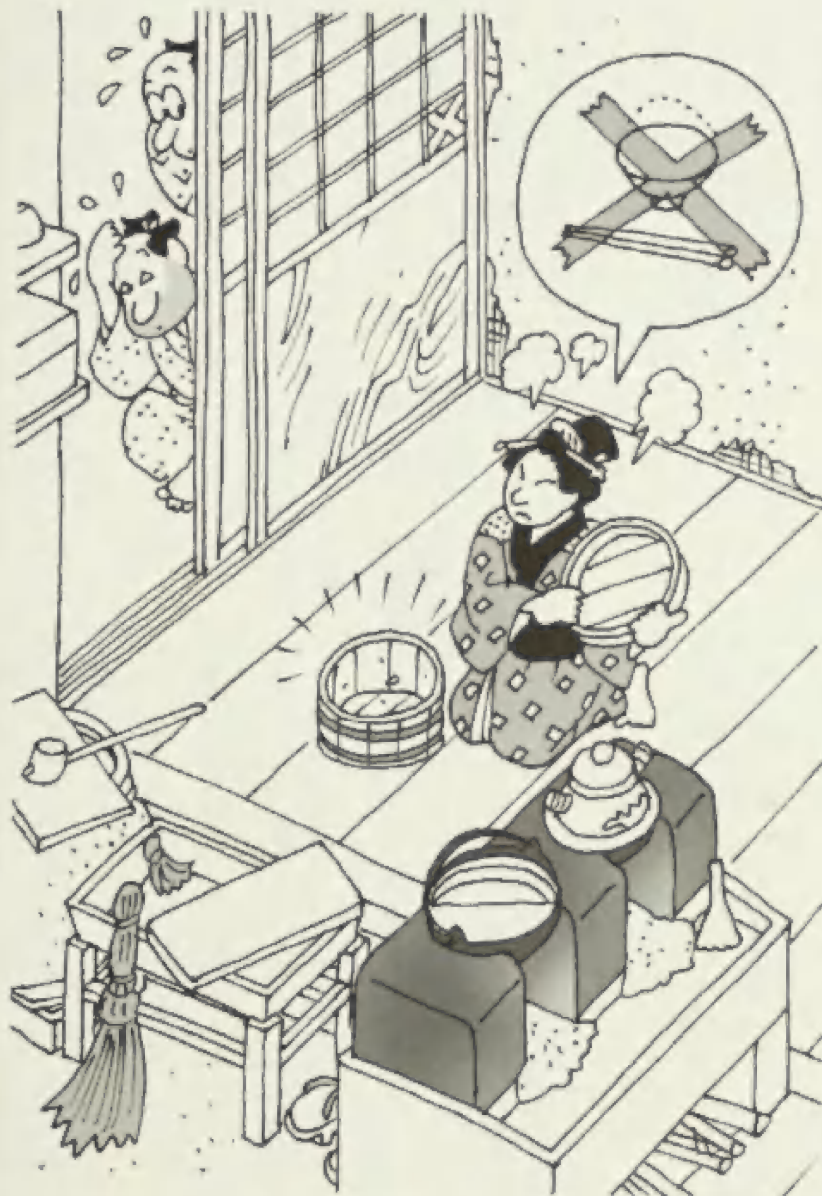
考えている。

と、自分のことを棚に上げて、  
棚からぼた餅、瓢箪から駒、  
がないかと

ごまかして

運がこまがりなむこと

あけえないラツキ



喜多「ついでに、もうちょつと借金してみつか？」

なんてばかりに、ふたりは旅の出発を決めてしまった。

喜多「じゃ、いつ行く？」

弥次「思い立ったが吉日だ。善は急げっていうだろう。」

思いついたらすくやるのがベスト

よいことはすぐやれ

本日、弥次郎兵衛と喜多八は、着の身着のままお伊勢さんに向かって

何のよついてもしないで、このまま

しゅっぱーっ！

喜多「駿州府中まで行けば、またお金が借りられるしね」

こうして、お江戸日本橋から伊勢、京都へ、ひたすら歩きつづける旅が

はじまった。

「ナイスなアイデアだ！」

弥次「オレたちや、根っこはやすのは、にあわない。浮き草みたいな生き方しかできねえんなら、浮き草らしく行くまでよ！」





昔取った杵柄

「杵柄」一つてのは、餅つきに使  
う杵の、手でにぎる部分。つまり、昔  
杵を持つてじょうずに餅をついた、あの  
うで前はおとろえてねえ。やれつてい  
うなら、今でもリツパにやつて見せるさ、  
つてこと。若いころ身につけたワザは、  
年をとつても十分使えるつて意味だ。



三つ子の魂百まで

「三つ子」は、双子、三つ子じ  
やあない。三歳の子ども、小さな子つて  
ことだ。そのころの心や考え方は百歳ま  
で続く。つまり、人間の性格や性質は、  
年をとつても変わらねえつてことだな。



梅檀は双葉より芳し

「梅檀」は、ビヤクダンつてい  
う、めつぼういい香りのする木。この木  
は、芽が出たばかりの双葉のころから、  
いゝ香り。だから、将来すばらしい成  
功をする人は、小さなときから、その素  
質や才能を発揮しているもんだつて。



拍車が掛かる

「拍車」は、乗馬用のくつにつ  
いている金具。オレたちの時代にはまだ  
なくて、明治時代に、西洋から入つてき  
たんだな。これで馬の腹を打つて、速く  
走らせる。つまり、力がくわわつてより  
速く進む、いきおいよくなることなんだ。



奇想天外、奇妙きてれつ。

予想もつかない考え、何ともおかしな

言語道断、空前絶後、百花繚乱の

とんでもない、ありえない、事件もいつばい

ボケとツツコミ珍道中がはじまるの

でありました。

思い立つ日を吉日とせん。

とにもかくにも、当たって砕けろ、

ダメでも一度やってみろ

いざ出発なのだ。



## や じ 弥次さん き た 喜多さんの



二度あることは三度ある

同じことが二回おきたら氣をつ  
ける。注意しないと、きつと三度目がある。  
失敗や災難なんかは、くり返されることが  
多いって教えだな。



四面楚歌

昔の中国に、楚という国があつ  
た。この国が漢と戦ったとき、漢の劉邦つ  
て將軍が、うまい作戦を立てたんだ。楚の項  
羽つて將軍をとりかこんだ自分の軍隊に、  
敵の楚の歌を歌わせたんだ。これを聞いた  
項羽は、味方の楚の人たちが降伏し、漢  
の軍につかまっと思つちまっした。「四面楚  
歌」は、まわりじゅうから楚の歌が聞こえ

ること。つまり、まわりはぜんぶ敵。味方は  
いないし、助けも来ないってことなんだ。



背水の陣

背中（せなか）に水。つまり、うしろは水  
辺で、あともどりはできねえ。攻めてくる  
敵に向かつて進むしかない。そんな形で自  
分の陣、つまり基地や隊列をつくるんだ。  
それだけ必死、決死の覚悟（かくご）つてことだな。



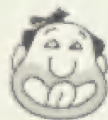
窮鼠猫を囓む

「窮鼠」は、追いつめられた鼠。  
逃げ場（は）がなくなり、ついにネコをガブツ！  
弱いものでも、強いものに必死で反撃すれ  
ば、勝てることもあるってもんだ。



## にほんご 日本語よもやま話

二 お伊勢まいりへ



飛んで火に入る夏の虫

「飛んで火に入る夏の虫」ってのは、あんまりりこうじゃあねえ。夏の虫は、光に集まってくるだろう。で、明るい火に飛びこんで、死にまうってわけだ。人でも、自分からあぶないところへドンドン向かって行くヤツがいるよな。で、ひどい結果になる。だれとはいわねえけどな。



夢食う虫も好き好き

「夢」は辛くて、とても食えないような葉っぱ。でも、その夢が大好きで、喜んで食う虫もいる。まあ、虫も人も好みはいろいろ。まわりにはよくわからんが、それなりのよさがあるのかねえ。



割れ鍋に綴じ蓋

ひびが入ったり、割れたりした鍋には、こわれた蓋を綴じてつなげたのが合うってこと。どんなヤツにも、なんとか相手がみつかるものだし、にたもの同士なら、うまくいく。結局、相手に高望みする前に、自分をよく見ろってことか……？



宵越しの銭は持たない

江戸っ子の心意気だ。宵は夜。「宵越し」ってのは、夜を越して次の日だ。江戸っ子は、金をちまちま、次の日までとっておいたりしねえもの。その日に稼いだ金は、パツとその日のうちに使っちゃうんだ。

# や じ 弥次さん き た 喜多さんの



## 瓢箪から駒

「駒」は、馬のこと。瓢箪のあの小さな口から、でかい馬が出てくるなんて、実際はあるわけがねえ。つまり、考えられないようなこと、思いがけないことがおこるって意味なんだ。冗談でいったことが、本当になっちゃったときにも使っな。



## 大目に見る

規則どおりにきびしく罰をあたえたり、しかつたりするんじゃあなくて、大きな目、大きな心で見ることよ。よーするに、罰を甘くしてくれたり、見逃してくれること。オレは大かんげいだね。



## 渡りに船

川を渡ろうと思ったが、歩いては渡れないし、橋もねえ。どうしたもんかと思っていたら、そこにつごうよく船が来たー！ このすばらしいタイミング。これぞ「渡りに船」ってわけだ。



## 思い立ったが吉日

「吉日」は、何かをするのにいい日ってことだ。つまり、何かをしようと思いついたら、「いつやろう……」なんてぐずぐずまよってみたり、「明日？ いや、あさってからはじめようかな」なんて先にのぼしたりしねえで、思いついたその日、すぐにはじめるのが一番ってことだな。





にほんご ほんし  
日本語よもやま話

お伊勢まいりへ



一発逆転

ひとつの何かで、それまでのこ  
とをぜんぶドーンとひっくり返す。わかり  
やすいのは、野球だな。一発のホームラン  
で逆転勝利、つてなわけだ。



起死回生

「起死」も「回生」も、死んだ人、  
死にそんな人を生き返らせるつて意味だ。  
死んだようなひどい状態、どうしようもな  
いところから、生き返る、立ち直る。オレ  
たちや、いつも「起死回生」だ。



棚に上げる

たとえば、親や家族に見せたく

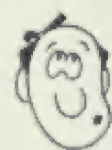


棚からぼた餅

ない物やさわられたくない物があるとする。  
そしたら、それを高い棚の上にかくして知  
らん顔、自分につごうの悪いことは、関係  
のない顔をして、ほつたらかしておくわけ  
さ。まあ、ほめられた手じゃねえけど。

ぼた餅は好きかい。甘くてうま  
いよな。ふつうぼた餅を食うためには、金  
を稼いで買いに行くとか、材料を集めてつ  
くるとか、何かの努力をするわけだ。そこ  
ろが、棚の下ではんやりしてたら、上から  
ぼた餅がポトツ。こりやラッキーつとパク  
リ。よーするに、運がころがりこんでくる  
こと、ラクしていい目にあうことなんだ。

# やし 弥次さん き た 喜多さんの



## 言語道断

・もとは仏教の言葉で「言葉で説明する道を断つ」。悟りの境地や深い真理は、言葉ではいいあらわす方法がない、つてことだった。だから、昔はいい意味に使われていたらしい。でも、今では、言葉にできないほどひどい、とんでもない、もつてのほかだ、つて意味で使うぞ。



## 空前絶後

「空前」は、前は空っぽ。今まで、こんな例はなかった。「絶後」は、後は途絶える。この先、こんなことは二度とない。よーするに、後にも先にもこれつきり。それほどもえすらしい、まずありえないこと、

つてえわけだ。



## 百花繚乱

さまざまな種類の花が、いつせいに咲きみだれる様子のことだな。色とりどりで、そりゃあきれいだ。そこから、花すぐれた人や、すごい美人、はたまたすばらしい出来事なんかがいっぱい、つてときにも使うんだ。たとえば、歴史上のある時代に、後世に名をのこすようなすごい人がたくさん集まっていたとき、その後もずっと残る芸術作品や学問上の成果なんかが一度にたくさん生まれたときに、「百花繚乱の時代」なんていうわけだ。

にほんご ばなし  
日本語よもやま話

二 お伊勢まいりへ



善は急げ

たとえば、お年寄りに席をゆずろうと思ったが、なかなかいいだせないでいるうちに、その人が駅で降りちまった、なんてことがある。いいと思ったことは、ぐすぐすせずに、さつさとやれ。「善は急げ、悪は延べよ」ともいうな。



着の身着のまま

たとえば、火事や地震にあつた。家からいろんな物を持ちだす余裕があることもある。非常用持ちだし袋、なんて物を用意していることもある。でも寝間着のまま、はだしのまま、何も持たずに、とにかく逃げるしかないことだつてあるよな。これ

が「着の身着のまま」つてえわけだ。



奇想天外

「奇想天外より落つ」といつてな、とてつもなく変わった考えや思いつきつてのは、ふつうの世の中の外側から降つてくるつてんだ。つまり、常識では考えられない、みんながびつくりするようなことだな。



奇妙きでれつ

「奇妙」も「きてれつ」も、めつほう変わつていたり、不思議だつたりするつて意味だ。それがふたつ重なっているわけだから、よつぽどヘン、おかしい、わけがわからん、つてえ感じだな。



三  
ダ  
ン  
ゴ  
と  
江  
ノ  
島<sup>しま</sup>



神奈川  
藤沢の宿





当たって砕けろ

この「砕ける」は、失敗すると  
か、うまくいかないってことだな。何で  
も、成功するかどうかは、やってみなくち  
やわからねえ。だからって、はじめる前か  
ら「やってみようか、でも失敗したらどう  
しよう……やつぱりやめようか」なんて、  
なやんではかりじゃしかたがない。とにか  
く、気持ちを固めてぶつかってみろ。砕け  
たらそのときのことだろう。さあ行くぞ！

えつちらおつちら歩いて、旅はちようど神奈川の宿を出たところにさしかかった。

弥次さんのところへ、小僧がひとり寄ってきた。

小僧「だんなさま、一文くだせえ」

ほんの少しの金

弥次「やろうとも。」

旅は道連れ、世は情け。

旅はひとりじゃつまらない。世渡りも互いに仲よくしよう

袖振れ合うも多生の縁、

過ばたて袖がふれた人とも何かの縁がある

つていうからな。

てめえ、どっから来た？」



さて、江戸時代の五街道より、東海道は、江戸と京都を結ぶ道。五十三次と申します。これは街道にある宿場町。歩いて往復、三十〜四十日かかるという東海道。もちろん宿がなくては困る。江戸は日本橋にはじまり、品川、川崎、神奈川……と、宿場町には、旅人を迎える宿がならんでいる。

ただし、宿にもいろいろあった。食事や風呂つき、ゆつくりとくつろげる旅籠屋もあれば、寝る場所があるだけ、飲むも食べるもご自分で、という木賃宿。これは、ふところぐあいに合わせて選ぶしかない。このほか、ところどころに旅人向けの茶屋がある。餅やダangoをほおばりながら、ちよつと一服、ひと休み。

口から出任せ、立て板に水のごとくウソがわいて出てきます。小僧をか  
何も考えずいいかげんに　すらすらと、よどめなく  
ら・か・つ・て・い・る・の・で・す・。

小僧「与次郎兵衛は知らねえが、与太郎どんなら、わしらのとなりさ、おる  
でよ」

弥次「おお、その与太郎よ、その家にのん太郎という年寄りのじいさまがい  
るはずだ」

小僧「じいさまはたしかに年寄りに決まってるあ」

弥次「それで与太郎どのおかみさんは、たしか女だっけ？」

小僧「おかみさんは女だよ。よく知っていなさる」



小僧「わしは奥州（東北）のほうから来ましただ」

弥次「ああ、一目瞭然だ、てめえの笠にでかく（奥州）って書いてあらあ。

一目でわかる

おつとこりやあ、万に一つの偶然だ。おいらもてめえの近所にいたも

めつたにない

んだ。

縁は異なるもの、味なもの。こいつあなつかしいねえ。

人のつながりは不思議でおもしろいもの

で、つかぬことを聞くが、畠山の与次郎兵衛どのは達者でいるか？」

元氣

もちろん、弥次さんは東北なんかにはありません。いつものお

調子者が顔を出し、ウソ八百、ホラを吹いただけ。

ウソをならべて

でたためをいった

自分の名前が弥次郎兵衛。一字をかえて、与次郎兵衛ってわけ。

小僧「おじちゃん、先に餅を買ってくれよ。」

そしたら、いうことはぜんぶ聞いてあげるからさあ……」

喜多「ハハハハハハ、こりやあ一本取られたね」

やられた

弥次「かついでいるつもりが、かつがれちまった。」

近頃のこぞう小僧はぬ抜け目めがねえ。油断ゆだんも隙すきもありやしない。

ずるがしこい

まったく氣を抜くヒマがない

子供こどもだからってあま甘く見みてたら、こつちがいた痛い目めにあっちまう。

子供こどものほうが一枚上まいうわて手てだった。機転きてんの利きく、末恐すえおそろしい小僧こぞうどもだ。

ワンランク上

場の空氣が読める

この先すごい人物になりそう

将来、ひとかどの者ものになるだろう」

人より成功する大物

てな馬鹿ばかなことをやってるうちに、藤沢ふじさわの宿しゆくの茶屋ちややに着つきました。

小僧は、お金がほしくて弥次さんに話を合わせてきますが、心の中では、

「そんなのあたりきしやりきのこんこんちきのブリキだよ」

当たり前前に決まってる

と思っている。弥次さん、すっかりいい気になって、

弥次「小僧さん、餅を買ってやろう」

といつて、餅を五つ六つ買ってあげました。

すると、別の小僧さんがやってきた。

弥次「てめえはどこだつて？」

ははあこれも奥州か、笠にでっかく書いてある。

これ、てめえの村に与茂作ってえオヤジがいるだろう？」

弥次さんと喜多さんが、煙草をすって待っていると、風呂敷を背負ったオヤジが、店先に立ち止まった。

オヤジ「もし、ちよっとおたずねし

ますが、江ノ島へはどう行きますか？」

ふざけんぼうの弥次さん、またしてもからかいの虫がうずきだした。

弥次「おまえさん、江ノ島へ行きなさるか。」

おつと合点承知之助　まかせてくれ。お寺の前に橋があるから……  
はい、わかった







弥次「ああ、腹へった。腹がへつては戦ができぬ。まずは腹ごしらえだ。

腹へこでは何ともうまくいかない

ばあさん！ ダンゴをあつためてくんな」

ばあさん「へい、焼き直してしんぜましょう」

弥次「ええい、てめえはだまつてろ。」

その道をずっと行くと、村はずれに茶屋が二軒ある」

喜多「そうそう。よく腐った物を食わせる茶屋だ」

弥次「そりや、てめえがいうのは右側の茶屋だろう。」

左側の茶屋は、よかったぞ。ピチピチする鯛、イキのいいエビがはね

る。おすいもの、卵としいたけと……」

オヤジ「もしもし、わしはそんなものは食わずともようござる。」

そこからまたどう行きます?」

弥次「そこをずっと行くと、石の地藏様がありやす」

弥次さんが説明したすと、喜多さんも、悪ふざけにくわわった。

喜多「いやほんとに橋といやあ、べっぴんさんのいる茶屋があつたっけ？」

すこい美人

弥次「ああ、それぞれ。去年おいらが泊まった家だ。

あのべっぴんは江戸の女よ」

喜多「どうりで気が利いてらあ」

オヤジ「もしもし、その橋からどう行きますんです？」

そんな女の話はよござんす。話をわき道にそらさないでくださいな」

弥次「その橋の向こうに鳥居があるから、そこをまっすぐに……」

喜多「曲がると田んぼに落っこちやすよ」

弥次「ああそうかー！」

オヤジさん、話が思いつきりそれてしまうので、さすがに怒りだした。

オヤジ「そんなことより、江ノ島へ行く道を教えてください！」

時は金なり、あたしや急いでいるんです  
時間をもつたいない

弥次「おおそうだった。すっかり忘れていた。

ま、いいじゃねーか、怒りなさんな。

急がば回れっていうじゃねえか。

急ぐときほど落ち着け

急いで事はし損じるともな

あせると結局失敗する

オヤジ「江ノ島ですってば！」





喜多「あの地藏様は皮膚病にきくんだよね」

弥次「ほんに皮膚病といやあ、金箔屋のため

吉は、草津の温泉に行つたっけか、ど

うしたろう？」

喜多「たぬ吉は、結婚して、大福町に家族を

もつてらあー」

弥次「大福町ってのはどこだ？」

喜多「大福町は、オレたちの住んでた通りを

まっすぐに当座町へ出て、そろばん橋を渡ると、そこが大福町だ」





そこへ茶屋のばあさんが、真っ黒黒助なダンゴを焼いて持ってきました。  
弥次「むむむ？ こいつあ、真っ黒なダンゴだ。

ありやりや、まだ火がついてらあ。

しかし、ばあさんに文句をいうのもかわいそうだ。大人げない。

いい年をしてはすかしい

弥次「は、江ノ島だったな。どこまで話したっけ？」

ああ地藏様だ。その地藏様から大福町をまっすぐに行くとな……」

オヤジ「江ノ島へ行くのも、そんな町がござるか？」

弥次「いやいや、それは江戸の町だっけ？ 頭がこんがらがってきたぞ。

こりや、前後不覚、五里霧中、茫然自失に右往左往！」

何がどうなつた

わからない

オレはどうした？

あつちかこつちかー

オヤジ「ええい、この衆は、まったく埒の明かない人たちだ。

答えの出ない

江戸のことなんぞ聞いとりやせんぞ。まるで本末転倒だ。

本題を忘れてる

仏の顔も三度まで。さすがに堪忍袋の緒が切れたあゝ」

私のガマンにも限度がある

もつたえられない！

オヤジさんはぶつぶついいながら行ってしまいました。

弥次「はははははは。てめえはあつたかいのがいいかと思つて、火のついたダンゴをやつたのさ。

まあ、喉元過ぎれば熱さを忘れる、つていうじゃねえか」

つらいことも過ぎてしまえば忘れていく

喜多「ええい、いまいましい。

自分がやつたくせに、自分を棚に上げてよくいうよ。

過ぎたるは及ばざるがごとし、つて孔子様もいつてらつしやるぜ」

やり過ぎは、たりないのと同じくらいひどい

昔の中国のえらい先生

弥次「これも旅の思い出よお。気を取り直して、心機一転、前途洋々で出発

気分を変えて

希望いっぱい

しよう。ばあさん、お世話になつたな」

ふたりはお茶代を置いて、次の宿場町へと向かいました。



物は考えよう。こりやおもしろい代物だから、喜多さんに食わして

やろう。……、おい、喜多さん、ダンゴが来たよ。

「おまえはこげたダンゴがよからう？」

喜多「お、待ってたぞ。どれどれ、パクパク。……」

アツツツツツツーイーイーッ、

油断大敵、火がぼうぼう、注意一秒ケガ一生

ば、ば、ば、ばあさん！　まだ火がついてい

るじゃないか！

とんだ目にあわせてくれたなあ。口がびりびりすらあ！」



## やじ 弥次さん きた 喜多さんの



縁は異なるもの、味なもの

・どつちかつてえと、男女の仲に使うことが多い言葉だ。どうしてこいつとこの人が……みたいなことがあるだろう。どこでどんなふうに出会って、つきあいだすのかはよくわからない。不思議で、おもしろえもんだなあつて意味だ。



ウソ八百

「八百」は、実際に八百数えるつて意味じゃねえ。とにかくたくさん、数が多いつてことだ。「江戸八百八町」つていうときと同じだな。だから、ウソをたくさんならべることに、ウソばっかりつてことだな。オレ様はそんなことはしない……？



ホラを吹く

法螺貝つて知ってるか。でつかい巻き貝なんだが、それに穴をあけて、笛のように吹くんだ。山伏が遠くの人への合図に使ったり、武士が戦いの合図に鳴らしたりする。で、この音がものすごくでかい。そこから、話をどんどん大きく大げさにして、ウソやでたらめをいうことを「ホラを吹く」つていうんだな。



口から出任せ

「出任せ」は、出るまんま、ぼつたらかしてことだ。つまり、いきおいで言葉が口から出るにおまかせ、いいかげんなことをいうつてわけだ。

にほんご ばなし  
日本語よもやま話

三 タンゴと江ノ島



旅は道連れ、世は情け

ひとり旅つてのはさびしいよな。喜多さんのような仲間がいれば、バカもい合えるし、何かあっても助け合える。だから、旅には仲間、道連れがいるほうがいいもんだし、世の中だって、お互い、仲よく助け合うほうがいいってもんだ。



袖振れ合うも多生の縁

仏教の教えでは、人は死んでも何度も生まれかわるんだな。「多生」は「他生」ともいう。今生きている世界とは別の世界。いわゆる前世とか来世のことだ。知らない人と、たまたま袖が振れ合ったような関係でも、じつは前世や来世で深い関わり

りがあるもんだ、人と人との関係は、偶然じゃないんだぞ、って教えなんだ。



一目瞭然

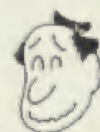
「瞭然」は、はっきりわかること。つまり、一目でわかる、だれが見てもはっきりしてる、ってことだ。オレがいい男なのは、「一目瞭然」だな。



万に一つ

そのまま考えりや、一万分の一。まずありえない確率だ。だから、めつぼうめずらしいってこと。ただし、可能性は0じゃない。だから、もしかしたらって意味で、「万……」「万が一……」とも使うな。

やじ 弥次さん きた 喜多さんの



油断も隙もない

昔、中国の王様が、家来に油が  
いっぱい入ったはちを運ばせて、一滴でも  
こぼしたら「命を絶つ」といったのが、「油  
断」って言葉のはじまりらしい。気をゆ  
るめたり、不注意になることだな。「隙」は、  
物と物の間。油断するにつけてまれそつだ  
から、ほんの少しの「隙」も見せてはだめ  
だ。絶対に気は抜けねえ、集中しろつてこ  
とだ。



一枚上手

「上手」ってえのは、上に行く、  
人よりまさっているつてことだな。「一枚」  
は、ここでは、紙なんかを数えるんじゃない

くて、一段、一ランクつて意味。よーする  
に、ランクが上つてわけだ。



機転が利く

「機転」は、まわりをよく見て、  
その場に合わせた判断ができる力。空気が  
読めるつてやつだな。「利く」は、効果的に  
使うこと。その場に合わせ、うまく切り抜  
けるのが、「機転の利く」やつなんだ。



ひとかどの者

ひとかどは、「一角」と書く。人  
よりすぐれている、人なみ以上つて意味だ。  
リツパなヤツ、力のあるヤツ、大したヤツ  
つて感じだな。



にほんご 日本語よもやま話

三 ダンゴと江戸島



立て板に水のごとく

板を立て、その上から水を流してみな。何もひつかかるものがねえから、どんどん気持ちよく流れるだろう。そんなふうに、つかえたり口ごもったりしねえで、すらすらと流れるようにしゃべること。オレたちのようにな。



あたりきしやりきのこんこんちきのプリキ  
ふつうでいや「当たり前」って

ことなんだが、この言葉はいまいちヤボだ。で、「あたりき」っていうようになったんだが、これだけじゃ、語呂がよくねえ。そこで「き」で終わる言葉を重ねて、いきおいよくしゃれた言い回しにしたわけだ。



一本取られた

柔道や剣道で「一本！」ってえのを聞いたことはないかい？ 技がきつちり決まって、その勝負に勝つことだ。「一本勝ち」なんていうだろう。だから、「一本取られた」は、「やられた」「負けちまった」ってことだな。



抜け目がない

抜けたところがない、手抜かりがねえってことだ。まわりに十分注意を払い、自分が不利になるような穴は絶対つぐらない。よく気がついて、損をしないように、いつもうまく立ち回る。こういうヤツが、「抜け目のないヤツ」だ。

# や し 弥次さん き た 喜多さんの



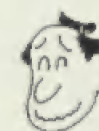
急いそいては事ことをし損とんじる

「遅ち刻こくだー」と大おあわてで家いを飛とびだして、気きがついたら、せつかくやつた宿題しゅくだいを家いに忘わすれてた。まあ、人にん間げんあせればあせるほど、ついつまらない失し敗ぱいをするもんだ。だから急いそぐときほど、まいず一いち度ど深呼しんこ吸そく。落おち着ついて、冷れい静じやうにならないとな。



前ぜん後ご不ふ覚かく

「不ふ覚かく」は、意い識しがはつきりないくて、感かんじたり考かんえたりできなくなつちまうこと。よく「酔よつばらつて前ぜん後ご不ふ覚かくになる」つていうよな。もう前まえに何なにがおこつたのか、その後あとどうなつたのか、つてこともわからない。なんにもわかんねえんだ。



五里霧中ごりむちゆう

「里り」は距きょ離りの単たん位いで、五里ごりは、今いまの言いい方かたでいや、約やく二十にじゅうキロきろつてところだな。この五里ごりの範はん圍いが全ぜん部ぶ霧きり。その中なかにいるわけだ。もちろんまわりは何なにも見みえやしない。様よう子すけがままつたくわからずに、どうしていいいかわからねえ、つてことだな。まちがつて「夢中むちゆう」つて書かかないようになる。



茫ぼう然ぜん自じ失しつ

「茫ぼう然ぜん」は、あんまりおどろいたり、あきれたりして、気きが抜ぬけること。「自じ失しつ」は、今いまの自じ分ぶんのこもも忘わすれちまう。つまりシヨックでポーツとして、わけがわからなくなつちまうことだな。

にほんご 日本語よもやま話



腹がへつては戦ができぬ

人間、腹がへつていちゃあ、力も出ないし、いい考えも浮かばない。集中しようと思つても、食い物のことを考えちゃう。実力を発揮できねえつてことだ。だから、何をするにも、まず腹ごしらえ。コンディションを整えようぜ。



おつと合点承知之助

「合点」も「承知」も、「わかつてるよ」「知ってるよ」とか、「OK、いいよ」「そつしよう」つてなときに使う言葉だ。どうせ、いい返事をするんなら、ノリのいい言葉にしたいものだ。で、「おつと合点承知之助」つてえいうわけだ。



時は金なり

金つてえのは大事なもんだ。無駄に使つちやあいけねえよ。だけど、金と同じくらい、大切なものがある。それが時間だ。じつはこれ、西洋からきた言葉。英語でタイム・イズ・マネーつてんだ。



急がば回れ

急ぐとき、近道があるのなら、あぶない道やよく知らない道でも、ついそっちを選んじまう。でもそれが落とし穴。回り道でも、安全で確実な道のほうが、結局早く着く。急ぐときほど、多少時間や手間がかかっても、確実なほうがいい。失敗したらやり直す時間がもつたないからな。

## や じ 弥次さん き た 喜多さんの



堪忍袋の緒が切れる

人はみな、イヤなことをガマンして、「堪忍袋」に、怒りをしまいこんでいるわけだ。その大きさは、人それぞれだ。どな。で、その袋が一杯になれば、いつかは口をしはつていゝるひもが切れて、一気に爆発！ よーするに「もう、ガマンできないー！ いいかげんにしろ」つてこと。



大人げない

大人つてえのは、それなりの落ち着きや分別があるもんだ。ところが、年齢は大人でも、そうじゃないヤツもいる。落ち着かねえし、つまらんことにムキになる。はずかしいよな、喜多さん。



物は考えよう

たとえば、コップにジュースが半分入っている。「もう半分しかない」とも考えられるし、「まだ半分ある」とも思えるわけだ。どっちを選ぶかは、その人しだい。同じことでも、よくも悪くも考えられるつてえわけだ。



油断大敵

「油断」は、気をゆるめたり、不注意になること。ちよつと気を抜いた結果が、大失敗につながることもある。だから、油断は、めちゃくちゃ強い敵と同じくらいおそろしいもんなんだ。注意しろよ、気をつけろよ、つて教えだな。





にほんご ほんし  
日本語よもやま話

三 ダンゴと江ノ島



右往左往

文字どおり、右へ往ったり、左へ往ったり……。おどろき、あわてて、あちこち、じたばた動き回ることだな。



埒が明かない

「埒」は、馬の稽古をする場所（馬場）のまわりをかこんだ柵のことだ。柵を開いて、中に入らなきや、馬の稽古もはじまらねえ。先へ進めないわけだ。で、答えが出なくて問題が片づかない。なかなか決着がつかないことを、「埒が明かない」っていうわけだ。「埒」が、決まった場所をかこんでいるから、決まりごとやルールがみだれていることを、「埒もない」ともいうな。



本末転倒

「本」つてのは、基本、根本。つまり物事を中心だ。「末」は枝の先っぽ。小さなこと、つけたしの部分だな。この「本」と「末」が、ひっくり返って逆になる。よーするに、オマケのほうに夢中になって、大切なことをいいかげんにしちまうわけだ。



仏の顔も三度まで

人から急に顔をなでられたら、だれでも気色悪いよな。でも情け深くて、やさしい仏様なら怒らない。だからつて図に乗っちゃあだめだ。三度もやったら、さすがに怒る。どんなにおだやかな人だって、ガマンには限界があるってこと。

# 四

## 風呂騒動



小田原の宿



喉元過ぎれば熱さを忘れる

熱いお茶をぐつと飲む。でも、

熱いのはほんのいつとき。喉を通り過ぎれば、もうへつちやらだ。同じように、苦しかったことも過ぎてしまえば忘れちゃうし、困ったときに人の世話になったことも、ラクになれば、どつかへいつちまうつてことだな。



過ぎたるは及ばざるがごとし

昔、中国の孔子つてえらい先生

がいったんだ。物事には、ちようどよいところというものがある。ほどほどが大切。限度をこえてやり過ぎちまえば、結局、たりのないのと同じ。どつちもよくないつてな。



心機一転

「心機」は心のはたらき、気持ちの動き。「一転」は一度にドツとかわることだ。何かのきつかけで、パツと気持ちが変わることがあるだろつ。これが「心機一転」。意識して、自分で気持ちを切りかえるなら、「心機一転する」だな。



前途洋々

「前途」は、将来、これから進む道のこと。「洋々」は、水が満ちあふれる様子から、希望がいつぱいなことをいう。よーするに、この先は大いに期待できるぞ、きつといいことがたくさんあるにちがいない、つてえ意味だな。

そうこうしているうちに、ふたりは、

小田原の宿に泊まることになりました。

喜多「よお、弥次さん、湯がわいたらお

風呂に入りやしよう」

弥次「おめえはなにも知らねえなあ、

湯がわいたら熱くて入れるもんか。

水がわいて湯になったら入りやしようとぬかせ」

喜多「あーいえばこういうヤツだ。

揚げ足取りめ。

細かいことにはささいヤツ





さて、江戸の時代には、ふつうの家には風呂はない。家でゆつくり風呂につかれるのは、身分の高いごく一部の人たちにかぎられていた。かわりに町で繁盛していたのが、湯屋とよばれるお風呂屋さん。朝から夕方まで営業し、毎日、汗を流す人たちでこみ合っていた。今でも、「旅の楽しみは食事と温泉!」、という人も多いものだが、当時の旅でも、旅籠屋での食事と、風呂はうれしいぜいたく。歩きつかれた体を休め、ホッとくつろぐこの幸せ。

ところがわれらが弥次さん喜多さん、不思議な風呂に出会ってしまった。旅してみれば、日本は広い。知らないことが山とある。さあ、どうする？

に入ればいいものかいな？」

この宿のお風呂は、上方（大阪）ではやっている五右衛門風呂という方式なのでした。

五右衛門風呂の底は鉄製です。かまどに火をたき、その上に釜をのせたように、風呂が置かれています。釜ゆでにされた大どろぼう、石川五右衛門にちなんでこの名前がついているのです。

入り方もかわっています。風呂釜には木の丸い板がうかんでいる。この板をふみこんで、しずめながら入ります。

そうすると、足の裏が熱くない。この板がないと、釜の鉄底に足が当た

言葉尻だけとらえてへりくつ抜かすな！  
言葉のはし  
くだらないりくつ

女中「もし、おふたかた、お湯がわきました。お入りなさいませ」

弥次「おお、水がわいたか、どれ入り

やしよう」

手ぬぐいをさげて弥次さんが風呂

場へ行ってみると、これまで見たこ

とのない、風呂桶のでっかいのがあ

るばかり。

弥次「あ？ はて、どうやって、どこ



肝きんがつぶれちまったあ。どうやって入はいるもんだか、見当けんたうがつかねえ。  
びっくした

ここは思案しあんのしどころだ。

しつかり考えないと

かといって、どうやって入はいるのか他人たじんに聞きくのもしやらくせえ。

いまいましい

うーむ、百戦錬磨ひゃくせんれんま、海千山千うみせんやませんのこの弥次やじさんをなめるなよお。

あれこれやってきて世の中を知りつくしている

悪戦苦闘あくせんくとう、試行錯誤しこうさくご、臨機応変りんきおうへん！ ……………。

困難くわんなんと戦いくさい

失敗しがいしながらも

なんとかうまくクリアする！

おっ？ 便所べんじょにゲタがあるぞ。

こいつあ、おもくろい。あつ、まちがえた。おもあかい。そりやおも

しろいだろってんだ。

少々しょうしょうきたなくなつてしょうがねえ。

ってしまつて、熱くて入れたもんじや  
ない。

ところが、五右衛門風呂、初体験の

弥次さんは勝手を知りません。

やり方

釜にうかんでいる丸い板をふただと

かんちがいして、とってしまいました。

弥次「さてと、入るぞ。よっこいしょ。

アチチチチチチ、足の裏が焼けちまう！

こりや、とんでもねえ風呂だ。

前代未聞、空前絶後の風呂だなあ。  
ひどくめずらしい





んが風呂に入ります。

ところが、弥次さんは喜多さんを困らせようとしてゲタをかくしてしまつたから、また一騒動がおこります。

そう、喜多さんも五右衛門風呂が初めてなので、入り方がわからないのです。

喜多「むむむ？　こりや、いったいせんたいどうやって入るんだ？

ええい、このままよ！　なるようになるさ！

清水の舞台から飛び降りる気持ちで入ってしまえ。ドッポーン。  
とにかく思いきつてやるしかない

アチチチチチチチチチ！！

こうなりや背に腹はかえられねえ。

多少のことはガマンしよう

あれをはいて風呂に入ってやれ」

なんと弥次さ

ん、便所のきた

ないゲタをはい

て、風呂に入っ

てしまいました。

弥次「こりやあ、ええわい。極楽至極」

もう最高だー

さて、すっかりいい気持ちになって湯を出た弥次さんに続いて、喜多さ



結構毛だらけ猫灰だらけってんだ。

よくできました

コ、スツッココって入るのさ」

喜多「ええい。ふざけないでくれよ。」

釜がじかに足の裏に当たって、人れないよ」

弥次「入れるに決まってるだろう。」

今の今までオレが入ってたのを知ってるだろ」

喜多「……………。おめえ、どうやって入った？」

弥次「はて。しつこい男だ。むずかしいこたあねえ、初めしんぼう。すると

だんだんちようどよくなつてくらあ」

喜多「バカいいなせえ。」

おーい、弥次さん、てえへんだー、

てえへんだー！

ちよつと来てくれー!!

弥次「騒々しいなあ、いったいどうしたつ

てんだ？」

喜多「おい、弥次さん！ おめえ、この風

呂へどうやって入った？」

弥次「バカめ。別に入りようがあるもんか。

問答無用、まずは外できんたまをよく洗って、そして足からドンブリ  
あれこれいうな



んがかくした便所ゲタをみつけました。

「読めた!」と、うなずいてゲタをは

いて五右衛門風呂に入ってしまった。

喜多「弥次さん、弥次さん!」

弥次「なんだよ、また呼んだか?」

喜多「なるほど、おめえのいうとおり、入

つてなれてみると熱くはねえ。

ああいい心持ちだ。

極楽極楽、旅行けはり、駿河の国に茶の香り、とくらあ」

浪曲「清水の次郎長」の一節





しんぼうしているうちに 足の裏が真っ黒にこけてしまうわあ」

弥次「ええい、埒の明かない男だ」

弥次さんは心の中でおかしくてたまりません。ふたりとも、五右衛門風

呂のほんとうの使い方を知らないってこと

じゃ、五十歩百歩、目くそ鼻くそを笑うつ

たいしてちがいはない 笑っほうも笑われるほうも似たようなもの

てやつですが、からかい好きの弥次さん、

笑いながら部屋にもどってしまいました。

のこされた喜多さんはいろいろと考えた

あげく、そこらを見回して、ついに弥次さ



破れた底から湯がもれだし、火の上に流れ落ちるとシューシュー音を立てました。

喜多「こりやあ一大事、

おおーい、助け船、  
手をかせ

助け船えー!!」

弥次「どうした、どうし

た、……お、

はははははは」

この騒ぎに宿の亭主が来てみれば、あまりのことに肝をつぶした。



ところがひとつ困ったことがありました。

喜多さんはゲタがなくても入れるのだ

といばってみせたので、弥次さんが見て

る前では風呂から出られません。そのう

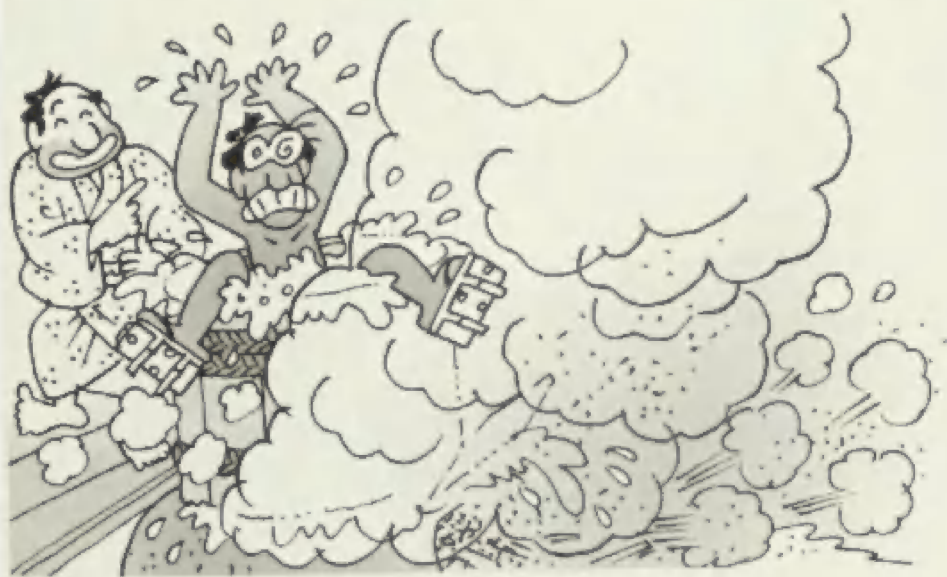
ちのぼせてしまつて熱くなつてきました。

喜多さんは、たまらずゲタでガタガタ

と風呂釜の底をふみつけました。

すると、ついに風呂の底をふみ抜いて

しまいました。



聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、と申します。

聞くのをはすかしがつて、知らないままでは一生はずかしい

あとは野となれ山となれ！

弥次さん喜多さんの旅はまだまだ続く。

今がよければ、あとのことをどうでもいいー

以下次巻！（ないかも！）



亭主「うわわわわ。これはまた、どうして、風呂釜の底が抜けたんですか？」

喜多「つい、ゲタでガタガタやったから、抜けちゃいました！」

亭主「なに!? おまえさんは途方もないお人だ。」

常識はずれの

風呂に入るのにゲタをはいて入るということがあるものですか！

どうしようもない人だ！」

喜多「いや、オレも最初は、はだして入ってみたけど、あんまり熱いからさ」

亭主「いやはやなんとも。にがにがしいことだ。」

「ここは風呂釜代を弁償してもらいましょう」

弥次「……………。しかたあるめえ。自業自得。身から出たさびってやつだ」

自分が悪い

苦しいのも自分のせいだ



## や じ 弥次さん き た 喜多さんの



百戦錬磨

・「錬磨」は、鍛えて磨きをかける。つまり、数々の戦いで鍛えられ、磨きあげられた、経験ゆたかな強者つてわけだ。そんじよそこらのひよつこじや、相手にかなりやしねえ。あ、これはもちろんオレ様のこと。



海千山千

昔から、海に千年、山に千年暮らしたへビは、竜になるつていわれてるんだ。このへビのように、いろいろな経験をして、世の中の裏も表も知りつくし、じょうずに世間をわたつていくのが、オレたちのような「海千山千」のしたたか者さ。



悪戦苦闘

長い人生、いつも順調とはかぎらない。ときには苦しく、不利な戦いもあるわけだ。けれどもそんな困難には、死にものぐるいで立ち向かう、必死の努力で対抗する。そして「悪戦苦闘」の末に、見事に勝利するわけさ。



試行錯誤

「試行」は、試しにやってみる。「錯誤」は、まちがえること。よーするに、答えがわからなければ、一度でうまくいくことはない。いろいろ試して、やってみて、失敗やまちがいをくり返しながら、正解に近づいていくつてことだな。

にほんご ばなし  
日本語よもやま話



揚げ足を取る

相撲や柔道で、相手が技をかけようとして足をあげたとき、そのあげた足をつかんで、倒しちまう。これが「揚げ足を取る」のはじまりだ。そこから、相手のいまちがいや、言葉のはしをとらえて、からかつたり、バカにしたりすることをいう。「揚げ足取り」は、揚げ足を取るヤツのこと。



前代未聞

「前代」は、前の時代で、今まで。「未聞」は、未だ、聞いたことがない。よーするに、今まで聞いたこともないような、めずらしい、おかしい、つてえことだな。



肝がつぶれる

「肝」は、肝臓のことだが、勇気や度胸は、「肝」にあるつて考えられているんだ。たとえば「肝が小さい」つていやあ、気が弱くて、いつもびくびくしているヤツのことだ。その「肝」がつぶれるつてのは、めちやくちやびつくりして、度胸も何もなくなつちまうつて感じたな。



思案のしどころ

「思案」は、いろいろとよく考えること。つまり、ここが大事なところ、いかげんに決めちゃいけねえ。よく考えて、知恵を出せつてことだな。あせらず、ゆつくり考えろよ。

や し 弥次さん き た 喜多さんの



清水の舞台から飛び降りる

京都に清水寺って寺がある。この寺の舞台は、ガケの上にあつてな、下をのぞくと、おこわい！そこから目をつぶってエイと飛び降りるように、死んだ気になつて、思いきつてやつてみることにだ。



問答無用

問いても答えも用はない。あれこれ話し合つても役に立たねえってこと。よく「問答無用」って、相手に斬りつけたりするだろう。「つべこべいうな」ってわけだ。



五十歩百歩

昔、中国で、孟子という人が王様



目くそ鼻くそを笑う

にいったんだ。「戦いするとき、武器をすて、五十歩逃げて止まった者が、百歩逃げた者を、自分より臆病だといったらどう思います」。王様はいったそうだ。「五十歩でも逃げたことには変わらない」。見た目に少しは差があつたとしても、結局は同じってことだ。

目くそと鼻くそ。どつちが上もありやしねえ。ところが目くそが「おまえさんはきたないねえ」と、鼻くそを笑いのにした。自分の悪いところに気がつかず、他人の同じような欠点をバカにする。まわりから見や、どつちもどつちだ。



# にほんご 日本語よもやま話

四風呂騒動



臨機応変

昔の中国、梁の国の軍の総司令官の言葉だ。「機に臨み変に応ず」ともいう。何がおきてても、そのときの様子や、物事の変化に応じて、ちゃんとそれにあつた行動をするつて意味なんだ。



背に腹はかえられない

何か大きな問題がおきて、とにかくそれを乗りこえなくつちやいけないとき、そのために、ほかのものをぎせいにしなさいいけないことがあるわけだ。たとえば腹を守るために、両手で腹をだきしめて、相手に背を向ける。背中がつかうかもしれない。



結構毛だらけ猫灰だらけ

「結構」は、すばらしい、よくできているの意味だ。だが、これだけではつまらねえ。「結構毛だらけ猫灰だらけ」。声に出していつてみな。なんだかウキウキするだろう。これがオレたちの言い方ってわけだ。



極楽至極

「極楽」は、仏教の「極楽浄土」を短くいつた言葉で、まあ、天国ってことだ。「至極」を言葉の最後につけると、「このうえなく、まったく」ってな意味になる。つまり「極楽至極」なら、「まったく天国のようだなあ」ってこと。喜多さんのようなヤツのことは「迷惑至極」ってえいうわけだ。





聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

人にものを聞くのは、正直はずかしいもんだよな。そんなことも知らないのかって、思われるのもイヤだしな。でもちよつと待て。知らないことは、聞かなきや結局わからねえ。わからないまままで一生過ごし、知らないまんま死んじまうのは、はすかしくはないのかい。それなら、聞くときだけはすかしいほうがマシじゃあねえか。いや、むしろ、はすかしがらずに、どんどん聞くほうがいいだろう。つてことだ。「聞くは一旦の恥、聞かぬは末代の恥」つて言い方もあるな。



あとは野となれ山となれ

まあ、とにかく今は、目の前の問題が片づけばいい。今がよけりや、あとのことなど、どうでもいいさ。やるだけやったら、あとはどうなろうが知ったことじゃねえ。そんな、オレたちの気分をあらわす言葉なわけよ。もとは、家や町のことをいつたらしいな。今、このときさえ栄えていれば、あとでつぶれて、なんにもない野原や山になっちまってもかまやしない。大切なのは今なのよ、つてことさ。

# 日本語よもやま話



## 助け船

「助け船」は、川や海でおぼれた人や、遭難した船を助ける救助船のこと。「すくいふね」ともいう。で、ここから、困ったときに手をかしてくれる人、助けてくれる人のことを「助け船」っていうようになったんだ。



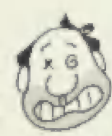
## 途方もない

「途方」ってのは、方向のことで、そこから方法とか方針、物の道理なんかをあらわす。だから「途方もない」は、「道理にはずれた」とか「とんでもない」って意味になる。ふつうの人の考え方や、常識からはみ出しているってえわけだな。



## 自業自得

仏教では、ひとつのおこないがある結果を生み、その結果が次の行動の原因になると考える。こうしたおこないのことを「業」といい、自分の「業」の結果は、自分で引き受けるべき。これが「自業自得」だ。まあふつうは、自分のやった悪事の報いは結局自分に返ってくる、って意味で使うな。



## 身から出たさび

刀からさびが出れば、結局、その刀自身をダメにしちまう。よーするに、自分のおこないや失敗が、あとで自分自身を苦しめるってこと。「自業自得」と同じことな。

あるよ。そこのは全部が鉄でできていて、ホントにふたをふんで入るんだ。鉄のザラザラした表面で背中をかくと気持ちよかったなあ。もちろんゲタは、はかなかったけどね（笑）。

気の合う友だちとふたりで旅をするのっていいね。テキトーなことをいしながら、あれこれちっちゃな冒険をするのは楽しい。旅ってほどじゃなくても、友だちと一緒に近くを探検してみなよ。いろいろ話をしながらね。最後にひとつ、僕と約束をしてほしい。

「ぜったいに『ウザイ』『キモイ』っていわない」ってこと。

このきたない言葉は、人をきずつけ、自分をよこしていく。そんな言葉のかわりに、弥次さん喜多さんの豪華な日本語を使ってくれ。

これが僕からのお願いだ。

齋藤 孝

## 弥次さん喜多さんの日本語で遊ぼう

どうだった？ ためになる日本語が「仕掛け花火」みたいに出てきて豪華だったでしょ？

江戸時代の人って、ホントに言葉遊びが好きだったんだよ。言葉で遊ぶって、ホントに人間らしい遊び方だよ。

みんなも、ことわざや日本語独特の言い回しを使って遊んでね。

僕の生まれたところは静岡市で、東海道が目の前だったんだ。だから、弥次さん喜多さんの旅が身近に感じられた。「丸子のとろろ汁」の話とかね。今回は静岡まで行きつけなかったけど、次の巻では僕の地元にも行きたいなあ。

五右衛門風呂の話だけど、僕は子どものころ、親戚の家で入ったことが



## 索引

「弥次さん 喜多さんの 日本語よもやま話」のページを表示しています。

### あ 行

悪戦苦闘 87ページ  
 揚げ足を取る 86ページ  
 明日は明日の風が吹く 23ページ  
 当たって砕けろ 42ページ  
 あたりきしゃりきのこんこんちきのブリキ 62ページ  
 あとは野となれ山となれ 91ページ  
 案ずるより産むが易し 18ページ  
 急がば回れ 64ページ  
 一枚上手 63ページ  
 一目瞭然 60ページ  
 一を聞いて十を知る 21ページ  
 一石二鳥 17ページ  
 一発逆転 38ページ  
 一本取られた 62ページ  
 犬も歩けば棒に当たる 18ページ  
 右往左往 66ページ  
 ウソ八百 61ページ  
 馬が合う 22ページ  
 馬の耳に念仏 19ページ  
 海千山千 87ページ  
 縁は異なるもの、味なもの 61ページ  
 大目に見る 39ページ  
 おっと合点承知之助 64ページ  
 大人げない 67ページ  
 思い立ったが吉日 39ページ

### か 行

金は天下の回りもの 23ページ  
 かわいい子には旅をさせよ 18ページ  
 堪忍袋の緒が切れる 67ページ  
 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥 91ページ  
 起死回生 38ページ

奇想天外 40ページ  
 機転が利く 63ページ  
 着の身着のまま 40ページ  
 奇妙きてれつ 40ページ  
 肝がつぶれる 86ページ  
 窮鼠猫を噛む 37ページ  
 清水の舞台から飛び降りる 89ページ  
 空前絶後 41ページ  
 腐っても鯛 21ページ  
 口から出任せ 61ページ  
 結構毛だらけ猫灰だらけ 88ページ  
 極楽至極 88ページ  
 五十歩百歩 89ページ  
 五里霧中 65ページ  
 言語道断 41ページ

### さ 行

思案のしどころ 86ページ  
 試行錯誤 87ページ  
 自業自得 90ページ  
 疾風怒濤 17ページ  
 失礼千万 24ページ  
 四面楚歌 37ページ  
 心機一転 68ページ  
 死んで花実がなるものか 23ページ  
 過ぎたるは及ばざるがごとし 68ページ  
 すねかじり 19ページ  
 急いては事をし損じる 65ページ  
 背に腹はかえられない 88ページ  
 前後不覚 65ページ  
 前代未聞 86ページ  
 栴檀は双葉より芳し 35ページ  
 前途洋々 68ページ



ぜん いそ  
善は急げ 40ページ  
せん り あれ いっ は  
千里の道も一歩から 18ページ  
そで う あ たらう せん  
袖振れ合うも多生の縁 60ページ

## た 行

たす ぶね  
助け船 90ページ  
たつと  
脱兎のごとく 24ページ  
た とり  
立つ鳥あとをにごさず 23ページ  
た いた みず  
立て板に水のごとく 62ページ  
たぐく むし す  
夢食う虫も好き好き 36ページ  
たね もち  
棚からぼた餅 38ページ  
たな あ  
棚に上げる 38ページ  
たけ みちづ よ なき  
旅は道連れ、世は情け 60ページ  
てん か む てき  
天下無敵 17ページ  
とき かね  
時は金なり 64ページ  
と ほう  
途方もない 90ページ  
と ひ い なつ むし  
飛んで火に入る夏の虫 36ページ

## な 行

な こ だま  
泣く子も黙る 20ページ  
に ど さん ど  
二度あることは三度ある 37ページ  
ぬ の  
抜け目がない 62ページ  
ねこ こ ばん  
猫に小判 20ページ  
のどもとす あつ わす  
喉元過ぎれば熱さを忘れる 68ページ

## は 行

はいすい じん  
背水の陣 37ページ  
はくしや か  
拍車が掛かる 35ページ  
ば し とうふう  
馬耳東風 20ページ  
はな もの  
鼻つまみ者 19ページ  
はら  
腹がへっては戦ができぬ 64ページ  
ひとかどの者 もの  
ひとかどの者 63ページ  
ひやくせんれん ま  
百戦錬磨 87ページ

ひゃっ か りょうらん  
百花繚乱 41ページ  
りゅうたん こま  
瓢箪から駒 39ページ  
ぶた しんじゆ  
豚に真珠 20ページ  
ふと ばら  
太っ腹 21ページ  
ほうしやく ぶ じん  
傍若無人 22ページ  
ほうぜん い しつ  
茫然自失 65ページ  
ほうとうざんまい  
放蕩三昧 22ページ  
ほうふく ぜつとう  
抱腹絶倒 17ページ  
ほうほう てい  
遍々の体 24ページ  
はとせ がお さん ど  
仏の顔も三度まで 66ページ  
ホラを吹く 61ページ  
はんまつてんとう  
本末転倒 66ページ

## ま 行

まん ひと  
万に一つ 60ページ  
み で  
身から出たさび 90ページ  
み こ たいやく  
三つ子の魂百まで 35ページ  
むかし と きわづか  
昔取った杵柄 35ページ  
め はな め  
目から鼻へ抜ける 22ページ  
め はら そ わら  
目くそ鼻くそを笑う 89ページ  
もの かんが  
物は考えよう 67ページ  
もんどう む ぼう  
問答無用 89ページ

## や ら わ 行

やせてもかれても 21ページ  
ゆ たんたいてき  
油断大敵 67ページ  
ゆ だん すま  
油断も隙もない 63ページ  
ゆ めす  
湯水のごとく 19ページ  
よい こ ぜに ち  
宵越しの銭は持たない 36ページ  
うち あ  
埒が明かない 66ページ  
りん き おうへん  
臨機応変 88ページ  
わた くら  
渡りに船 39ページ  
わ なべ と ぶた  
割れ鍋に綴じ蓋 36ページ



84569648477

ISBN4-569-64847-9

C0093 ¥1000E



1920093010009

定価:本体1,000円(税別)

PHP研究所

